



第 75 号
 京都教区推進員だより
 発行 2018年1月1日
 京都市下京区花屋町通烏丸西入
 真宗大谷派京都教務所
 京都教区推進員協議会
 会長・堀江 勇夫
 ☎ (075) 351-5260

年頭にあたって

京都教区推進員協議会 会長 堀江 勇夫

昔、中国で季節を色で表す文化があり、日本に伝わって私たちの世代では、日常会話で常套的に用いますが、ある前途有為な青年が、高齢者を敬う会の祝辞の冒頭に引用されたので、改めて人生を回想し、往く末に思いを致してみたく思います。

春は青春で青（二十歳までで多感）、夏は朱夏で赤（四十歳までで情熱）、秋は白秋で白（六十歳までで成熟）、冬は玄冬で黒（八十歳までで枯淡）。さて、この先はどうなるのでしょうか？

この世の森羅万象は、すべて循環の法則で動いています。ならば人生において、次は当然に青春への回帰しか有りませぬ。同朋それぞれに趣深い生き方を思惟して参りましょう。

そしてその思惟の行き着くところに、私たちすべての人間生涯の心の動きとして、避けることのできない六道輪廻の法則が、働いていることにも気づかされることになるのです。

循環と輪廻どこかでつながっていると思いませんか。

さて、二〇一七年度もいよいよ後期活動へと移ってまいります。京推協に於きましては”京推協だより”を「光雲」と愛称することとなり、より親しみやすく・感慨深く・楽しみに、読んで頂くための素地ができたものと思わせて頂いております。広く会員の皆様挙つての



全国の推進員の皆様へ思いを語る会長の挨拶

投稿を御願いたします。

そこで今後の取り組みを、新たな気持ちで確かめ合っておきたいと思います。

一つは、京都教区推協への未加入組の減少を願って、年度内に三カ組を三役がお伺いさせていただき、お話を伺う為の日程調整を終えたところであります。訪問実施後の経過を報告させていただきます。

二つは、京推協役員研修会を、平成三十年四月に因伯組方面での開催を志向しており、目下関係者の皆さんと協議中であります。また来る平成三十年五月三十一日～六月一日に、山陽教区担当で鷺羽山にて開催される。第四十五回近畿連区同朋の会交流研修会への積極的なご参加を願っていきます。

三つは、教区門徒会員と教区推進員の良好な関係作りについては、既に教区門徒会長と平成三十年一月十八日に、各々常任委員出席の懇談会で、取り組み内容を話し合うことで合意いたしております。

四つは、京推協の活動拠点づくりについては、教区内の諸別院を会所として、

別院の護持運営に一助を成し得ないか模索を始めるとしていますが、引き続き継続していきます。各組に於いて、別院研修計画を持って頂ければ大変幸いです。京推協としましても会議や研修の会所を、別院巡回で実施していくことが、今年度中に実現できればと思っております。

五つは、教区改編が具体化したしますと、推協運営への影響も少なからず及ぼされるものと考えられますので、事実を謙虚に受け止めて基本的な対応策を検討していきます。

六つは、男女共同参画の提唱と定着については、各組それぞれの事情を勘案したうえで、性別に偏りの無い役員就任をお願いし、教区推協三役および常任委員並びに代議員に占める女性の割合を高めていくよう、今期も引き続き日常から雰囲気づくりを願っていきます。

会員皆様のご協力を御願いたします。

合掌

第二十五回真宗同朋の会 全国交流研修会に参加して

京都教区推進員協議会副会長 井本徹

十月一日から三日間、長崎市で開催された全国大会に、京都教区より四名で参加させていただきました。

大会テーマは「真宗門徒の自立と連帯」。サブテーマは「非核非戦」念仏者として共に生きん」です。

今回長崎に赴くにあたり、先に被爆した広島市を通過しながら、私が生まれるほんの十七年前に、広島と長崎でどんなことが起こったのかを、少しでも理解できればと思っておりました。

長崎は大型船も入港できる長い湾を挟んで、限られた平地にビル群が建ち並び、それを取り囲むような山々の斜面に、ひしめき合うように住宅などが建っており、このような地形ですので自転車を見かけることはありませんでした。

会場は稲佐山という山の中腹にあり、北は北海道から南は鹿児島まで百七十二名の門徒さまが集い、スタッフ

として九州連区の教導さまやご住職さま三十名にご参加いただきました。

ご講師の長崎教区第一組 萬行寺前住職 亀井廣道氏より、「御仏事としての非核非戦」という講題でお話しいただき、そのあと十五班に分かれて、一回目の座談会を持ちました。

座談は全国各地、土地柄も風習も異なる門徒同士が、三日間お互い話し合い、気づかされたり、共感することに大切さがあるように感じます。

二日目は現地研修の前に、被爆体験された森田博満氏の講話で、十歳のとき、爆心地から一・八キロ地点の自宅玄関先のことです。

森田氏が配給を知らせに自宅へと走っていたその瞬間、電気がスパークしたようなオレンジ色の光と共に、自宅に直撃弾が炸裂したような音と風圧で吹き飛ばされましたが、間一髪、家の影で直撃は避けられました。しかし数十センチ後ろを走っていたお兄様は、一瞬にして閃光を浴び、七年後二十五歳の若さでお亡くなりになりました。



長崎教務所 非核非戦の碑 原子爆弾災死者収骨所

そしてその後の長崎の街の状況を、「地獄のような」という言葉で、昨日のことのように声を震わせながらお話しされました。

現地研修は二班に分かれ、長崎教務所内「非核非戦碑」にある、原爆で亡くなった方々の「原子爆弾災死者収骨所」

に参拝しました。そこは坂と階段を登った狭い通路の先にあり、参加者は自然と長い列となってお参りしました。

ただ、静かに手を合わせに行くことだけを思っていた私でしたが、無数の遺骨と共に「これはお子さんのもと思われる頭蓋骨です」という説明を受けたとき、「ごめんなさい」という言葉となつて、自分の認識の無さに胸が突き上げられました。

後の座談会では、遺骨について「もし自分の家族だったら、すぐに埋葬してあげてほしい」、また逆に「遺骨によって原爆の悲惨さを後世に伝えていただいている」など、様々な感想がありました。私たちに答えはありませんでした。次は長崎教務所からいただいた冊子、『「共に生きよー」からの引用です。

ただひとつなる罪
戦没者は決して敵の砲弾や原爆で死んだのではありません
戦争を「聖戦」と呼び美化していこうとする人間の無明――

そのただひとつなる罪によってではないでしょうか

「反核反戦」と「非核非戦」

他者にはたつきかける「反」とともに

自分のうちに問いかける「非」という語をもつて

はじめて自分というものがあきららかになつてくるのです

「核」も「戦」も他人事ではありません

自分自身のところの中にこそ「核」や

「戦」は存在するのです

「非」とは私の考え方、生き方、社会のあり方を問い直す仏の悲のはたつきな

り
「核」とは人間の「チエ」なり 人間の

無明なり

「戦」とは人間の心の奥深くにある差別の心なり

亀井先生はこれらの言葉を、戦後長崎の背景と一緒に説いてくださり、最後に「私たちはこれから共に聞いていきましょう。共に話していきましょう」と結

ばれました。

今回も、「戦争」の中に「自分」がいる

ことを知らされた研修会になり、聴聞の大切さをあらためて感じました。

閉会后、懇親会で当時の長崎のお話を聞かさせていただいた佐世保市の八十歳代のご婦人と、「またのご縁を」と握手し会場をあとにしました。

合掌



本来の役割を果たす。

若狭第二組 小堀 隆寛

九月中旬に京都教務所で行われた、京都教区推進員協議会と門徒会の常任委員による合同懇談会に出席させて頂きました。

出席の皆さんのご意見をお聴きしているうちに、どの組の方も自分の所属する寺や組、大谷派の将来について真剣に憂いておられるのをひしひしと感じま

した。

三十年以上前に、推進員とはなんであるかの説明も受けず、なんであるかの疑問も持たず、その役割も知ろうとせず、行きがかり上なんとなく養成講座を受講し、後期講習を受けて推進員となりました。若狭二組の推進員協議会の会長を仰せつかつてからこのかた、二組の会員の方に少しでも多く聞法の機会を持つてもらおうべく役員の方々の協力を得ながらそれなりの努力をしてまいりましたが、そもそも「推進員とは何ぞや」の理解も自覚もない活動であったことを合同懇談会に出席させて頂き痛感しました。

改めて「推進員とはなんぞや」を理解するために、ネットで調べてみましたところ、次のような文章を見つけました。

真宗同朋会運動とは、昭和三十七年に「真宗門徒一人もなし」という真宗大谷派の自己批判から始まった信仰復興運動です。当時の宗務総長はこう述べられています。「(物質至上主義に毒され)宗門が仏道を求める真剣さを失い、如来

の教法を自他に明らかにする本務にあまりにも怠慢である。(後略)・・・」

形骸化し聞法道場としての機能を果たしていない寺院が、その機能を取り戻し、親鸞聖人の教えを学ぶ施設に戻ることが求められ、各寺院やその地域等に「同朋の会」という聞法の会を開設することが進められ、その運動を推進する人材として育成員(僧侶)推進員(門信徒)の制度が設けられました。・・・

推進員がいくら増えても、それぞれの推進員が推進員制度の誕生した理由や自己の果たすべき役割を認識していなければ「真宗門徒一人もなし」の事実が変わらないと私は思います。又、養成講座の中でも推進員制度が誕生した理由、推進員の役割を説明することを必ず取り入れて頂きたいと思います。

我が所属する寺にも「〇〇の会」「××の会」と称する会がありますが、どの会に所属する方もその会が生まれた理由やその会の果たすべき役割を自覚せず、誘われたのでなんとなくその会に所属されているのではないかと推察しま

す。

われわれ推進員も、今一度、推進員制度誕生の理由と本来果たすべき役割を自覚すべきではないでしょうか。

教区門徒会との懇談会に出席させていただいてこんな風に強く感じました。

合掌



合同委員会報告

近江第六組 太田 勝彦

お釈迦様が入滅され、日本では一〇五二年(永承七)から一万年間は末法の時代と言われており、現代は末法の真只中にある訳で戦乱・疫病・テロ等の社会的不安を相まって「教」教説・「行」実践・「悟り」結果」の内教えのみが残る時代になり、私達は「忘」利他の教えを守らずに、自分勝手な考えと行動で「自分ファースト」の時代になっております。その結果先人たちへの畏敬の念も薄れ「寺離れ」「墓終い」が当たり

前になっております。以前は住職と長老が話し合って何事も行っておられた寺院も、最近は役員も若返りまして門徒さんを抜きにしての運営は出来ない様な時代に変化しております。京都教区の門徒会と推進員では現状を踏まえてこれからの寺院の護持運営をして行く中で、今回第一回目の合同委員会が開催され、お互い忌憚のない意見の出し合いの場を設けられました。

門徒会中野会長と推進員堀江会長との挨拶があり、十四名の委員の自己紹介から始められました。最初門徒会の方から地方にも色々と思ひ違いや推進員の役目等が良く判ら無く、推進員さんに聞いたところ会費は支払っているが何に使われているか、会員は何をすれば良いのか分からないと聞いている。今日見せて頂いた推進員の役員名簿を見ると近江の方が多くて地域差を感じていますとのご意見がありました。それにお応えされた堀江会長は門徒会員さんは所属寺院の代表として選出されており、真宗大谷派の行政的な組織でもあります。門徒

会委員と住職が協調して、寺門の運営全体に係わる大切な役目です。それに対して推進員は住職と寺院の護持運営事業推進に協力し、将来に亘りどのような持続発展させてゆくかを、常に考え活動する自発的な役目であります。また京都教区では機関誌「教区だより」を発行されています。また全推協（全国推進員連絡協議会）では機関誌「羅網」を発行し、京推協（京都教区推進員協議会）では機関誌「光雲」の発行もしております。その中には総会資料として会計報告もさされています。愛称を今まで「推進員だより」だったのを九月号の第七十四号より「光雲」に変更されました。未加入組には入会を勧め、事業等も掲載しておりますので推進員だけでなく門徒会の皆様も読んで頂きたいです。最後に門徒会会長中野さんが、門徒会も推進員も皆寺院の護持運営と親鸞聖人の教えを生活に取り入れた幸せな生活を望んでいるのだから、会合を重ね、門徒会員さんも推進員養成講座を受け推進員になる様にして、双方が智慧を出し合って寺離

れが無いようにしなければいけません。今回の様にキツカケを大切に繋がる事が大事です。それには役員さんだけが骨を折り苦労しても門徒さんが付いてこなければ、役員だけが浮いてしまう事のないように注意しなければなりません。と締めくくられて終わりました。

話し合いの場では流石双方の委員さんは人間関係も豊富に経験されて居り丁寧に言いたい事は素直に出して、相手に不快感を与えない語り方は見習うべきことが多々ありました。この様に何もかも理解されている方ばかりでしたら寺離れや墓終いの様な事は起らなかつたのでは無いかと思いました。

合掌

第四十四回近畿連区同朋の会 推進研修会に参加して

近江第七組 杉浦 俊雄

私は二〇〇三年十二月に推進員後期教習受講を終了し、近江第七組の推進協議会会員の一人となりました。以来

同朋の会推進研修会の参加を勧められ、二〇一〇年三月第三十八回近畿連区同朋の会推進研修会・二〇一一年十月第三十九回近畿連区同朋の会推進研修会に参加しました。そして今回二〇一七年五月第四十四回近畿連区同朋の会推進研修会に参加を勧められ受講を致しました。「研修会の趣旨」については私も良く理解が出来ませんでした。今回の研修会により少し理解が出来たように思います。

その内容は、「真宗門徒とは、名告っているけど、自分にとって南無阿弥陀仏が本当に御本尊（本当に尊いこと）になっっているだろうか？」この問いかけから真宗同朋会運動は始まりました。それは、単に一門徒の信心の問題ということに止まらず、寺が本当に真宗の寺院として開かれていないのではないか、真宗とは、名ばかりで真宗にあらざることを真宗としてきたのではなかったのかと、寺の在り方、宗門の在り方そのものを根底から問い直していく歩みでもありました。



香川県 琴参閣にて

以来五十年、試行錯誤を繰り返しながら、僧侶・門徒が一体となって「われ、念仏者たらん」という願いに立ち、「真に生きる意味」と「共に生きることできる世界」を見いだしていこうと今日まで継続されているのが真宗同朋会運動です。その運動の推進と発展のために、「推進員（推進員制度）」がうまれました。しかし、高齢化や死亡によりその数は

年々減少し、先行きは、大変厳しくなり、推進員も役割がわからなくなってきたております。

私たち推進員は、原点にたちかえり、まことの推進員はどうあるべきかを研修しました。今後は、各寺院が僧侶と一体となって一名でも多くの推進員が増加するように努力しなければいけないと思いました。

合掌

年忌法要を終えて

若狭第一組 大澤 岩彦

秋の彼岸に父の五十年、母の十三年の年忌法要を勤めました。父が六十一歳で亡くなったのは私が二十六歳の時で喪主として近くの山裾にある三昧場で茶毘に付していただきました。

母はその後、家族と共に年を重ね九十三歳の生涯を全うしました。

両親は明治の生まれで、戦中戦後に五人の子供を育て、苦難の世を乗り切り去っていきました。廻り来る年忌法

要を勤め終えて、安堵と過ぎ去りし日々思いを馳せ、受けたご恩を懐かしく思い返しています。

法要は煩雑な日々埋没しがちな我が身を反省し、こころ静かに先祖や有縁の方々への感謝を確かめる一日にしてくれました。

私は二十八歳で結婚し三十歳の時に建設工事に転職し、定年後も四年余り在職しました。

電力、鉄鋼、石油化学等の基幹産業設備を建設する専門会社で、家から出たことの無かった自分が海外二箇所、国内は若狭をはじめ関東から広島まで各地の現場を渡り歩く人生を経験しました。専門職の集団で私はクレーンと運搬車両の管理運転を担当し、多くの仲間と共に、行く先々の大仕事を乗り切ってきました。

地球の重力に逆らって軽重大小の機材、機器等を運び、揚重機械を駆使して建設して行きます。気弱で小心者の自分が、どんな大型重機、特殊運搬車も臆する事無く動かす事が出来ました。孤独な

よろしくお願い申し上げます。

合掌

本山初参り

近江第二十五西組 伊吹 克

近江第二十五西組では年間事業計画の中で毎年正月の本山参りを恒例としています。

近江第二十五西組（高島市マキノ町）二十ヶ寺の組です。

一月十日頃実施を目標に、大型バス二台で八十人を目途として参拝者を募集します。

当日はマキノ町内各地から参加者を集め、JR近江中庄駅を九時頃出発。京都東本願寺へは十時半頃到着、御影堂の外陣の中に入れてもらい、組長の調声のもと、同朋奉讃式により参拝の門徒全員で「正信偈」を唱和。その後本山や教務所から新年の挨拶で終了。新春のおごそかな雰囲気のもと身が引きしまります。

勤行の後は各自東本願寺境内を散策する人、お買い物をする人、それぞれ楽

しんでおられます。本山を後にして、次は昼食会場へ。限られた予算でメニューを考えなければならぬ世話役も一苦労です。大概はお寺の食堂をお借りします。食事の後は毎年行き先が変わります。

昨年は京都御所、平成二十八年は本山・涉成園、平成二十七年は長浜別院・大通寺で、その前は仁和寺。毎年行き先が代わるので皆様たのしみにしておられます。

帰りの車中は町内で日頃顔を合わせない人達の懇親の場となり、多少お酒も入り盛り上がります。

私の組にとつての悩みは会員数の減少です。会員数が平成二十九年では一二四名になりました。

会員数の減少により八十名の募集がきびしくなり昨今は一般門徒さんにも参加を呼びかけています。

昨年冬に後期講習が行われるので推進協議会へ加入が見込めるかと期待しています。町内の門徒さんが年に一度本山へ参り、一日のバス旅行で親睦を深め

運転室では雑念を捨て操作や判断ミスが無いよう慌てず平常心で仕事に当たりました。心にはいつも自分と人と機械を信じ、自分の背後に阿弥陀仏が居て下さる事でした。いつも仏様は不安な心を打ち消し、勇気と自信を与えてくれる大きな存在でした。危険や事故が隣り合わせの世界に身を委ね、怪我や大きな事故も無く、運の強い器用で丈夫な体を与えて呉れた両親や多くの皆様に改めて感謝する昨今です。

六十五歳で会社を辞し、母を半年間自宅で介護して、家族や兄弟みんなまで臨終を見届けました。

光陰矢の如し、五十年を振り返ると行き先々に太陽と米の飯、阿弥陀仏に見守られ、充実した幸せな日々でした。

無我夢中で走り通し、仕事一途に生きてもう一人の影武者が居たように思われてなりません。母亡き後、地域で微力ながらご恩返しに頑張つて生きています。

推進員の仕事も皆様のご指示ご指導を仰ぎながら勤めたいと存じますので

られたらこれ以上はないと今後も続けて行きたいと思います。

合掌

御遠忌を経験して

近江第二組 服部 正司

蓮如上人の五百回御遠忌と宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を経験してその想いと感じ方の違いに気づかされました。振り返りますと、今から十年余り前、



五十を過ぎた私に寺の御遠忌実行委員会から報道の係が指名されました。何回かの会議に出席して後遠忌の大変さにひとごとのように驚いておりました。役に付かれた方はそれぞれが懸命に頑張られ、その甲斐あってか当日は快晴の天氣に恵まれ、素晴らしい円成でございました。

今回の宗祖親鸞聖人の御遠忌は少しばかり前回とは異なりました。東日本大震災を経験して寺の維持継承をするには、今のままの寺の状況では次の震災に耐えられるかとの疑問が総代の中にありました。

かといって、他寺のように建て替えとなると多額の用立てが必要であり、何日も議論がされました。そこで、耐震診断をしてからということになり、建築士に耐震診断をお願いいたしました。結果は耐震診断をするまでもなく不可でありました。何度も建築士に相談して、屋根の荷重を減らせれば改善すると説明をうけ、その方法を検討しました。

その想いが通じたのか、パソコンから

はある会社のホームページが出てまいりました。早速会議に出して、その会社に相談してみることになりました。熱心な会社で早速担当者が名古屋から飛んできてくれました。震災以降各寺にとっては深刻な問題で、全国の多くの寺から



相談が来ていたとのことでした。建て替えとなると多額の負担が発生し、また一部の役員に多額の負担をお願いせざるを得ません。しかし今までのようなことを繰り返してしまつたら、今後寺の役員になる人はなくなります。そこで改修案を考えることになりました。

第一に安全が維持できること。第二に金額が各門徒に理解されうること。第三に今後の寺の護持運営に利便性もはかれることでした。それらを相談している間に話は煮詰まり、各門徒に理解されるであろう案に落ち着きました。何度も総代会で検討を重ね、総会に諮りました。過去のようには役員の多くの負担を求める声もありましたが、お内仏があるなしの差だけはつけて、平等に負担を求め、しかも五年間の分割払いを原則にすることで門徒のご理解を得たのです。その時には宗祖親鸞聖人の御遠忌までできるかどうか考えられませんでした。

そしていよいよ着工の運びとなり、平成の大改修が始まったのです。いつも脳裏にあったのは、建築代金の問題であ

りました。広く各門徒に今の状況を知っていただく為に、事務局ニュースを発行し、工事の進捗状況、会議の開催状況、資金の集金状況を写真を添えてお知らせしました。御遠忌のことで会議が持たれたのは竣工が見えてきたころからでした。

しかし、五年間という時間からはまだ二年ほどありました。そのころには、寺の外部の改修もこの際にとり案が出てきて、植栽を伐採して、のちの維持費の削減と安全を考え、また駐車場の整備も計画いたしました。当初からは二回目の負担は求めないことが前提となっており、苦渋の中でご寄付の案内をさせて頂きました。門徒様からは形の違う負担要請とお叱りも頂きましたが、ようやく御遠忌を迎えるまでになったのです。

御遠忌となると、新調せざるを得ないものも当然出てきますが、借りれるものはお借りして、役員でできるものは出来るだけ自前でまかない、結果その姿勢は各ご門徒にも伝わり、台風の接近する中で、意味深い御遠忌が挙行できました。

まさに手作りの御遠忌、五十年ごとの御遠忌に今思えることは、未来に引き継げる念仏道場を五年という時間をかけて臨めたことでもあります。なんの事故もなく、役員にも欠員が出ることなく、手を携えたものが全員この日を見たこと、門徒から頂くねぎらいの言葉に、いま南無阿弥陀仏と声を出さずにはおれませんが。

この日まで、住職、坊守には気が抜けない毎日であったと思います。最後の住職の挨拶に今日が始まりの一日であると、護持運営に新たな志を述べられ、ご遠忌を締めくくられました。

合掌



お寺の集まりとは

出雲組 伊藤 一男

私は日々畑の仕事をしています。毎年五月頃から七月頃までの三ヶ月は、湿度も気温も高まる時期で畑の草も繁りがちになり、草刈り作業をしても毎日追われる日々が続きます。

毎年今年こそはと頑張るのですが、気が付くと余裕のない心で生活しており、それが態度にまで現われ、時折気付いては自分自身を苦しめるといった事がありました。

そんな暮らしの中、昨年五月頃私のお寺真浄寺の住職から、毎月一回お勤めの練習をやってみたいと相談を受け、私も何人かの人に声をかけましたが、初めはどれだけ集まるだろうかと不安で一杯でした。そして六月から毎月二十八日の親鸞聖人のご命日に行うことになりました。私の不安をよそに十五名の参加があり、私も声をかけることの大切さを学びました。

今は正信偈だけでなく阿弥陀経へと

練習が進んでおります。月一回の集まりで夫々年令の差はあるものの会話もはずみ、集まることによる仲間意識が育つて来たように思います。今年になって、誰が言うともなく話の中から「本山詣り」が総意で決まり、四月十六日、十七日の二日間バスで出かけることになりました。その中には帰敬式を受ける人も含まれており、一つの目標を共有することで何かが変わるということをつくづく感じました。

毎月一回お寺に集まるだけで、集まった人の声を聞くことが出来、自分自身も外から見ること出来て、時には元気をいただくこともあることを知り、門徒という仲間意識が更に強まることを確信しました。私達がお寺に詣ること自然に家族もお寺に出向くきっかけとなり、その後姿が子供達にも及んでいるように感じます。

昔のお寺への意識と今のお寺への意識では大きな開きがあります。私の畑仕事も草刈り作業に追われる時期が来ますが、今では何か違う自分になった気が致します。

合掌

活動報告

●二〇一七年九月四日 於 教区会館 合掌

第二回 三役会

・教区門徒・推進協との合同委員会への検討等

●二〇一七年九月十四日 於 教区会館

教区門徒会・推進員合同委員会

・教区の現状と課題について

●二〇一七年十月一日～三日

第二十五回全国同朋の会全国交流研修会

会場 長崎市 稲佐山観光ホテル

講師 亀井廣道氏

(長崎教区第一組萬行寺前任職)

テーマ「非核非戦、念仏者として共に生きん」

●二〇一七年十一月二十一日 教区会館

午前 第三回 三役会

・役職者一泊研修会の開催日程の検討

・未加入組の訪問日の打合わせ

・機関誌「光雲」の編集報告

午後 本山・常磐会館の報恩講に参詣

十一月二十八日まで各組から参詣

詣があります。



暁鳥からす 『魂萌ゆ』

疑い疑い疑いぬいて
疑う余地のない時に
はじめて信が
芽生えてくる

仏法を聞くためには
何の準備も資格も
必要ではありません
『蓮如・人と教え』



瀬戸大橋

□お知らせ

◎第四十五回近畿連区同朋の会推進研修会

当番教区・山陽教区

日時 二〇一八年五月三十一日

六月一日

会場 鷺羽ハイランドホテル

講師 伊藤 元氏

(日豊教区 京都組徳蓮寺前任職)

編集後記

新年明けまして お目出度う御座います。
旧年中は教区推進員協議会の運営にご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。
昨年は機関誌が、京都教区推進委員日より、愛称が“光雲”に決まり、皆様より好評をいただいています。

又、十月、長崎市で第二十五回真宗同朋の会全国交流研修会が開催されました。

民族・宗教の違いや経済格差による対立によって世界各地で戦争を起こしている事実があります。このたびの研修会のテーマは反核反戦・不核不戦争。是核是戦でなく、仏から願われた言葉「非核非戦」で

「念仏者として共に生きん」
多くの事を学びました。

掲示板の言葉より

人をダマス
キツネが居るのでない
キツネに
ダマサレル
人が居るだけだ

加藤 勉
合掌